

## 故西村 晃先生を偲ぶ

岸 基 史

1980年4月、私が西村先生のゼミ生となったある日、先生はこのようにおっしゃった。「僕にはノーベル賞を採るような論文を書けるとは思わへんし、僕の研究がただちに政策に應用され、人々をより幸福にするとも思えへん。」カリフォルニア大学バークレー校での1年間に亘る在外研究から戻られて間のない、新進気鋭の助教授に対する私達の期待が裏切られたような気持ちであった。いささか失望した私達に、先生は次のように続けられた。「僕は先人の研究を一步、いや、たとえ半歩でも先に進める事ができればええと思うてる。そしたら、誰かが僕を乗り越えて、それをさらに一步進めてくれるかもしれへん。僕の名前なんか残んでもかまわへん。こないして経済学研究が一步ずつ進んで行って、いずれ、よりよい社会が実現されることを願っている。」静かに語られたこのお言葉の中に、経済学研究を通じ人々の幸福のために生涯を掛けようとする先生の情熱と堅い意志を私達は感じとったのである。

当時、西村先生は非ワルサ的の不均衡モデルの枠組みでインフレーションの分析を試みておられた。J・P・ベナシイの非ワルサ的の不均衡モデルの問題点を鋭く指摘され、何が解決されるべき問題であるかを明らかにする中で、インフレーション研究の進むべき方向を示された。また、在庫品の生産に投入された労働を保蔵労働とするという新しい保蔵労働の概念を生みだされ、その頃急速に広まった合理的期待形成仮説を應用しながら、労働市場の分析にも取り組んでおられた。

先生は景気循環、特にインフレーション、雇用と賃金率の変動を研究対象とされた。これらの問題の解明には均衡分析では限界があると感じておられ、独自の不均衡理論体系を構築して行くことをライフワークとされたようである。

その後、在庫調整とマクロ経済の安定性について研究を進められるとともに、1980年代半ばから新しく始まったニュー・ケインズ経済学の理論展開、その中でも、G・マンキューやD・ローマーらによる価格調整コストと景気循環及びインフレーションの研究に対する批判的検討を始められた。先生は常に現実の経済を見据え、経済学の動向をキ

ヤッチし、最新の研究を批判的に整理しながら、地道にこつこつと業績を積みあげてこられた。しかし、それと同時に独自の理論体系を生み出すことの苦しみも抱いておられたように思う。

この頃、気分転換と運動不足の解消のためにと、テニスラケットを手にした先生のお姿をキャンパス内でよくお見かけしたものである。しかしある日、ちょっと調子が悪いからと軽い気持ちで病院へ出かけられたのだが、そのまま即入院、手術となってしまった。1990年2月のことであった。結局、すい臓、胆嚢、脾臓、小腸と胃の3分の2を摘出するという大手術となってしまった。同年6月末までのわずか4ヵ月半の休養のあと、先生は再び教壇に戻ってこられた。先生は「内蔵をみんな取ってしても、ほとんどあらん様になってしもた」と、まるで他人ごとのように平然と話しておられた。

日に何回か血糖値をチェックし、ご自分でインシュリンを注射しながら、教壇に立ち、研究を続けるという生活が始まった。手術後1年ほどは先生のご様態も快方に向かった。どこまでやれるかやってみると、飴をなめて血糖値をコントロールしながら経済学部長杯ゴルフコンペに参加されたこともあった。

しかし、その後先生のご様態は悪化の道をたどり始めた。入院先の病院で検査を受けてから、奥様の栄夫人に付き添われて大学に行って講義をし、病院に戻って直ちに検査を受けるという時期もあった。学校への途中腹痛を起し、講義時間に数十分遅れ、休講と勘違いして帰りはじめた学生達を呼び戻して講義をされたこともあった。血糖値のバランスを崩し突如意識を失われることもしばしばであった。この様な状態にありながらも、ほとんど休講されることなく教壇に立ち続けておられた。先生は周囲からの長期療養の勧めを頑なに拒まれた。教壇に立ち、学生と接する事が先生の支えになっていたようである。

この間、病床に伏せながらも、先生は数量調整とニュー・ケインズ経済学に接する論文の作成に着手されていた。その一方で、ニュー・ケインズ経済学の最新の理論展開を一冊の本にまとめあげる計画もたてておられた。しかし、1993年夏に体調を崩されたため休職され、そのまま教壇にお姿を現される事はなかった。

西村先生は温厚で誠実なお方であった。どんなに議論が白熱しても、声高に話されることもなければ、相手の話の途中で口を挟まれる事もなかった。ゼミの学生の発表に対しては、それがどんなにいい加減で間違ったものであっても、最後まで耳を傾けられた。そのあとで、とことん学生に質問されながら誤りを指摘され、その上でご意見を述べら

れた。先生からの質問はゼミ生にとってかなり厳しいものであったが、先生は学生に対して決して教師ぶったりされることはなかった。学生からの質問に対しても、先生はご存知でない事については知らないとはっきりおっしゃった。その場でいい加減な返事をされず、必ず調べてきて下さった。

私は、先生が人を疑ったり批判したり、あの人はいやな人だというような事を仰るのを一度も耳にした事がない。本当に一度もないのである。栄夫人も、ご家庭においてもそのような事を口にするのを聞いたことがなかったと語っておられる。西村先生の人に対する態度は相手が学会の権威であれ、質問に来た一学生であれ、少しも変わる事がなかった。この様に振る舞う事は先生にとって至極当然で自然なことであった。西村先生はこよなく学生を愛されたし、当然学生からも慕われた。先生のお宅や研究室には西村ゼミの学生だけでなく、多くの学生が質問や悩みごとの相談などに訪れた。先生はその記録を丹念に付けておられたようである。

西村先生はお酒、ことに日本酒を大いに好まれた。先生はいくらお酒を飲まれても、闊達に議論を始めるということもなく、ふだんと全く変わる事がなかった。お酒に酔う事よりも、お酒の味そのものを楽しんでおられるようであった。コンパの席では、にこやかに学生にお酒を勧められるのだった。

西村先生は、理想に向け、強い意志を持ち、しかし、決して気負う事なく、諦める事もなく、一步一步誠実に人生を歩んでおられた。ここに先生の愛された佐藤一斎の「言志四録」の中の言葉がある。

少にして学べば、則ち壮にしてなすことあり

壮にして学べば、則ち衰へず

老いて学べば、則ち死して朽ちず

この言葉の半ばで先生は逝ってしまわれた。しかし、先生の強い意志と、一人一人の学生を思いやり大切に作る温かい心は朽ちる事なく私たちの心に息づいている。

——西村先生は箕面の勝尾寺に近い大阪北摂霊園で安らかに眠っておられる。——

(『同経会報』50号(1994年3月)より転載)